

一人ひとりの力を信じる

第39号(サンキュー)の会報をお送りします。ラオス南部の遠い山奥にあるラロ小学校を建てることができました。創立20周年の年にAEFAの原点のような学校を建てることもできたのも、ご支援いただく一人ひとりの皆さん、そして、ダヤシリさんはじめ現地のパートナーのおかげです。一人ひとりの思いを、子どもたちの未来のためにしっかり届けるというAEFAのミッションの大切さをあらためてかみしめています。

3月のベトナム訪問では、開校式の合間に、今後のプロジェクト候補校を訪れました。ある学校で、一人の男子が、英語



で、学校の現状と課題、そして、何が必要なのか、わかりやすく話してくれました。彼だけではなく、多くの子どもたちが、ものおじせず、積極的に話しかけてきて、それこそ、ラロのような雰囲気を実感しました。

校長先生や先生たちに、その秘訣を尋ねたところ、

この学校では、通常の授業に加えて、英語の授業、そして、アートの授業を進めているとのことでした。少数民族出身の子どもたちは言葉の課題を抱えていますから、どうしても、コミュニケーションをするのが苦手になりがちです。だからこそ、ベトナム語を学ぶことはもちろん、外国の人とも話することができる英語、そして、自らの思いをさまざまなかたちで表現する機会を積み重ねることができるアートというのはとてもよいのだということです。

今年は先の大戦から80年、ベトナム戦争から50年です。スリランカの内戦もそうですが、戦争は解決につながらなければ、心にも身体にも深い傷跡を残します。戦争ではなく、平和の実現には教育の力が必要です。そして、その教育を担うのは人の力です。一人ひとりの力を信じ、そして、一人ひとりの子どもたちの未来の可能性を信じて、これからも丁寧に一つひとつのプロジェクトを進めていきたいと思えます。

あらためてお知らせしますが、7月6日には、AEFAフォーラムを開催します。変化の激しい今、AEFAはどんなことに挑んでいるのか、皆さんにお伝えし、皆さんと共に考える機会とします。お会いできることを楽しみにしています。



理事長 亀井善太郎

AEFAフレンド会報

39号

2025年5月7日



特集

一人ひとりの優しさが集まって学校ができた
～ラオス ラロ・プロジェクト～
スリランカのパートナー ダヤシリさんと日本、そして AEFA

AEFA
マンスリーサポーター

募集中

AEFAの活動を継続的に支援していただく「マンスリーサポーター」を募集しています。サポーターの皆様からのご寄付は、アジア山岳少数民族の子どもたちの可能性をひらく教育支援プログラムのために活用させていただきます。

金額(毎月)

月額1,000円(1口)から5,000円(5口)まで選択できます。

また、児童・学生の方々もご参加いただきやすいように、月額500円のプログラムも設定しました。

登録方法

寄付プラットフォームとして実績ある「Syncable」を使用しています。クレジットカード決済が可能です。

1. 右下のQRコードを読み取り、SyncableのAEFAページにアクセスしてください。
2. 「支援方法」より、「寄付する」を選択してください。
3. 「頻度」の欄で「毎月」を選び、「金額」の欄で月額を選択してください。
4. クレジット決済に必要な情報を入力してください。
5. 登録いただいたメールアドレスにSyncableからのメールが届きましたら受付の完了です。



<https://syncable.biz/>

Q「アジア教育友好協会」で検索



個人と非営利団体を繋ぐプラットフォームサービス
Syncable(シンカブル)に登録しています



<https://syncable.biz/>

Q「アジア教育友好協会」で検索

当サイト経由でAEFA会費・寄付のカード決済ができます

AEFA Web & SNS

Web Site



Facebook



Instagram



私たちは各国のパートナーNGOと手を携えて活動しています。

ベトナム: Research & Communication Centre for Sustainable Development (CSD)
ラオス: Association for Community Development (ACD)
タイ: Raks Thai Foundation (CARE Thailand)
スリランカ: Rotary Club of Colombo (RCC)



AEFA アジア教育友好協会
Asian Education and Friendship Association

〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-3-22 アーバンセカンドビル 3F TEL: 03-6265-6490 FAX: 03-6265-6491

一人ひとりの優しさが集まって学校ができた

～ ラオス ラロ・プロジェクト ～

ラロってなんだろう？

「ラロ」が地名であること、ラロという村のことをご存知の方は日本にほぼいないでしょう。ましてやこの村を訪れた人など皆無に近いはずですが。

ラロ村はラオス・サラワン県サムアイ郡の山岳地帯の奥深く、ベトナム国境に隣接する山のでっぺんにあります。物理的にもアクセスが難しく、情報も隔絶されており、ラオスの人々にさえほとんど認知されていない小さな村です。

昨年11月にAEFA理事の金子がこの村を訪れました。ラロ村で進めていたAEFAプロジェクトの学校が完成したのです。

AEFAとラロ村とのつながりは、AEFAの現地パートナーNGOであるACDからの提案がきっかけでした。ACDは7年前から、ラロ村に暮らす少数民族パコ族をさまざまな形で支えており、粗末な校舎で勉強する子どもたちのことに心を痛めていました。

ラロ村では一般的な資材でも入手困難です。村に通じている道路は険しい山道のみで、大型資材の運搬は不可能な

のです。このため村の建物は簡素な作りでガラス窓もありません。子どもたちは板で囲いトタンを載せただけの小屋で勉強していました。風が吹く日は土の床から砂埃が舞い、寒い日には足元が冷え、激しい雨が多い土地柄、トタン屋根に当たる雨粒の音がうるさくて雨の日は授業ができない、そんな校舎でした。それでも子どもたちは学校で勉強するのが大好きです。風雨に負けず学校に通ってくるラロの子どもたちのために、少しでも快適に安全に学べる環境を作ってあげたいというACDの願いと、もっとも弱く、かえりみられない存在に寄り添いたいという私たちAEFAの願いが、ひとつになりました。

いちばん高いところにある、いちばん大事なものを

日本を朝出発し、ベトナム・ハノイを経由してラオスの首都ビエンチャン到着は夜になります。翌日ビエンチャンから南部パクセー空港まで約1時間のフライト、パクセーからラライ(ベトナムとの国境チェックポイント)までクルマで約6時間。そこからは徒歩でラロ村に向かいます。11月のラオスは



左) みんなの前で教科書を音読する男子 右上・右下) ラロ校の生徒たち



上) 村の一番高いところにできた新校舎 左下) 新校舎で勉強する子どもたち 右下) 生徒全員が集合して記念写真

乾季で晴天が続くのが一般的ですが、サムアイ郡には冷たい雨が降り続いていました。険しい岩場を登り、腰まで水につかる川を渡り、ぬかるんだ悪路を2時間登ってやっとラロ村にたどり着きます。ふと目を上げると、雨に煙る山の頂上近くにペーパーミントグリーン屋根が浮かんで見えました。

それはラロ校の屋根でした。新しい校舎は村の中で最も高い位置に建っていました。これは、大雨のときに高いところにあったほうがより安全だからという理由です。村人たちが学校を大事に思っていることがよくわかります。

新しいラロ校は頑丈な作りで、外気温をある程度遮断することができます。耐水塗料を使って、雨が多い現地の気候にも耐えられるものになりました。「学校で勉強するのが好き!」というラロの子どもたちの笑顔、新しい校舎が守っています。

大根が、焼きそばが、学校になった

ラロ校建設を支えたのは複数の支援者からの支援金です。「今、一番必要とされる場所に使ってください」と寄付して下さった企業や個人の方、学校菜園で大根を育てて販売した代金を寄付して下さった小学生とライオンズクラブの皆さん、企業のチャリティーイベントで焼きそばやクレープの売上を寄付して下さった会社の方など、さまざま

です。「なにか自分たちにできることで支援しよう」という皆さまの優しさが集まり、AEFAに委ねて下さった寄付金を積み上げることで、新しいラロ校が実現しました。

ラロ・プロジェクトに充てた支援金の中には、複数の学校からの寄付も含まれています。そのうちひとつの高校では、文芸部とボランティア部の生徒たちが古本市で本を売って売上金を寄付してくれました。生徒たちがまず考えたことは「ラロ村の子どもたちは何が一番ほしいのかな?」でした。ラロからの返答は「あたたかい服や毛布がほしい。」

東南アジア、ラオスというと亜熱帯のイメージがありますが、ラロの標高は1050メートル。住居は竹や草で作られており断熱性が低く、電気もなく、暖房器具もありません。子どもたちや村人たちは半袖半ズボンに裸足で過ごしており、寒さに震えることもたびたびあるようです。高校生たちの思いと古本は、フリースのひざかけやあたたかい衣服になってラロに届きました。ラロの村人たちがこれを山のでっぺんまで

※ラロ・プロジェクト支援者の方々のそれぞれの活動をAEFAのホームページで紹介しています。ぜひご覧ください。



背負いあげました。ラロの子どもたちは衣服やひざ掛けをとっても喜んでくれました。

ラロで金子が驚いた

ところで、ラロ村を訪れた金子が心から驚いたことが二つあります。ひとつはラロの人々のオープンマインドな様子です。初めて見る日本人に対して子どもたちはものおじせず、明るい表情で応えてくれました。村の女性たちも笑顔で写真撮影に応じてくれました。これは、ラオスの山岳少数民族ではまず見られない光景です。これまで接してきた少数民族の人々は無口で、特に子どもたちは何度促されても発言せず、じもじして、時には泣き出してしまふこともあります。外部の人間を警戒して黙ってにらんでくる大人たちも珍しくありません。ラロはラオスの他の少数民族よりもさらに隔絶された山奥にあるのに、そこに住む人々はひらかれているのです。

もうひとつは人々の教育への熱意です。劣悪な環境の旧校舎でも子どもたちは熱心に学校に通っていました。中学や高校への進学意欲も高く、ふもとの学校へと進学する子どもが多いのです。また、ラロ村の学校の先生はラロ村出身。民族の言語も文化も理解した先生が村の子どもたちを教えています。AEFAのめざす理想形ができています。なぜなのでしょう？

その答えは、ACDが長年にわたりラロの人々に寄り添ってきたことにあると私たちは考えています。ラロ村におけるAEFAプロジェクトはラロ校建設が初めてですが、ACDとしてはそれ以前からラロの人々の人権を守り生活環境を改善するための活動を行ってきました。たとえば栄養改善プロ



簡素な建物が点在するラロ村の様子

ラム「リトルシェフ」もその活動のひとつです。リトルシェフでは子どもたちが活動の中心となって栄養、保健衛生、調理法などを学んでいます。これらACDの活動を通じてラロの人々は健康や生活を自ら改善し、自信と誇りを得て、より良い未来を目指しています。

思いを集めて、つなぐ

ラロ校は地理的にも規模的にも支援を得やすいプロジェクトとは言えませんでした。それでもラロ校建設が実現したのは、多くの方々がそれぞれの優しさをお寄せくださったからです。

「なにか自分にもできることで誰かを助けたい」という思いが集まれば、実現できることがあります。学校建設に限らず、緊急性や重要度の高いさまざまなプロジェクトにお一人おひとりの「できること」をつないでいきたいと考えています。子どもたちの今を未来へつなぐために。

現地報告 金子 恵美

2024年11月にラオスのラロ校、ノンケーとホーコンナイ（図書館開館式）、既存の建設校など8校を訪問しました。1年半ぶりのラオスで驚いたのは首都ビエンチャンの賑わいと物価の高さです。ビエンチャンでは建設中だった高層ビルが完成し、道には車が溢れて渋滞が発生するなど、賑わっていました。

ラオスは国内産業が乏しく多くの物を輸入しているため、近年の通貨安はインフレに直結します。ビエンチャンからラオス南部のパクセー（AEFAプロジェクト対象地の最寄空港）への航空料金は、円安も加わってなんと以前の2倍！「高い！高すぎる！」と騒いでいたところ、帰りはACD代表のNongさんが車でビエンチャンまで約12時間の道のりを送ってくれました。以前は3日間かかっていたとのこと、道路状況は大幅に改善しています。

陸路で気づいたのはすれ違うトラックの多さです。ラロ村はベトナムとの国境ライの近くにあり、道路には通関を待つトラックが延々と並んでいました。20年前は木材を運び出すトラックが多く、「ラオスから森が消える、大きな素晴らしい木がたくさんあったのに」とNongさんは嘆いていました。今では伐採は厳しい許可制になっています。代わって目にするのは鉱物を運び出すトラックの列、列、列。これも、ラオスの“安い資源”を持ち出すもの。そうせざるを得ない国の状況に、悲しい思いがします。

首都ビエンチャンの賑わいとは対照的に、山岳地帯の村々では出稼ぎのために村や学校から若者・成人が消えています。村に残っている若者も仕事無くアルコールや薬物に依存し、治安が悪化しているという話もありました。村の学校においても、生活の厳しさから中退せざるを得ない生徒（特に男子高校生）が多く、生徒数がコロナ禍前の半分以上となってしまった中高校もあります。一方、ラロ村のよ

リトルシェフ ～少数民族の栄養改善プログラム～

ラオス南部サラワン県は少数民族が多く暮らす地域です。ここでは子どもたちの栄養不良が問題となっています。AEFAの現地パートナーであるACDの調査により、サラワン県山岳部の幼児・児童はラオス全国平均に比べて身長や体重の成長が不十分であることがわかりました。

その背景には、栄養の知識や重要性をまだ理解していない10歳未満の児童が乳幼児の世話をしていること、お腹を満たすため主食のモチコメなど炭水化物中心の偏った食生活であること、経済的理由から入手できる食材が限られ、栄養バランスのよい食事ができないこと、栄養価を損なわず適切に調理する方法を大人たちも知らないということがあります。衛生環境が整わず、子どもが下痢になっても十分な医療を受けられず、時には命を落としてしまうこともあります。



年少の子どもたちに栄養素について教えるリトルシェフの子どもボランティア

うに、子どもたちが熱心に勉強を続けている学校もたくさんあります。

新しく建設されたラロ校を訪れたときは授業の真っ最中。校舎の中は、外の寒気を遮断してほっとできる温度ではあるものの、マフラーを友達と3人で仲良く一緒に巻いている子もいました。教科書を皆の前で音読していた高学年の男の子は、私たちに気づくと一瞬はにかんだような笑顔を浮かべ、それからまたしっかりと読み続けました。もう1つの教室では低学年の子どもたちが学びます。にこにこしながら、こちらをちらちらと見ている男の子もいましたが、多くは一心に書き取りをしていました。（ノートが無くて座っているだけの子もいましたが。）集中してしんとした空気の中、子どもたちが鼻水をしゅんしゅんすすする音が賑やかでした。子どもたちの学びを応援したい、と改めて決意した今回の訪問でした。

子どもたちはまた、ACDの「リトルシェフ」プロジェクト

で教わった歌をたくさん歌ってくれました。“栄養たっぷり野菜をいっぱい食べよう♪”とか、“おそうじ手洗い歯磨きできれいになると気持ちいいよ～♪”など、手拍子にあわせ身体を動かしながら歌う様子はとても楽しそうで、ラロの子どもたちからの最高のプレゼントでした。



支援者から贈られたフリース毛布にくるまるラロの子どもたち

スリランカのパートナー

ダヤシリさんと日本、そして AEFA

スリランカで 21 校の AEFA プロジェクトに、現地においてご協力いただいているのはダヤシリ・ワルナクラスーリヤさんです。スリランカと日本をつなぐ実践者としての実績から、スリランカ人と日本人の多くが「ダヤシリ先生」と呼んでいます。ダヤシリ先生の日本、AEFA との出会い、そして、これからについてお話を伺いました。



Q: 日本との関わりについて教えてください。

17歳のときに、父が経営する雑貨店で扱っていた陶器に興味を持ちました。当時のセイロンでは陶器を製造していなかったため、父からアメリカイギリスで海外修行するように言われました。私には14歳のころから日本人のペンフレンドがいたのですが、そのことを手紙に書いたところ、なんとお父さんが陶器の会社を経営しているというのです。そのご縁で、1960年21歳のときに初めて来日しました。愛知県瀬戸市で8年間窯業を学び、その間に妻節子と出会いました。陶器の会社を立ち上げるにあたっては、セイロンではあたりまえだった英国式のトップダウン型の経営ではなく、経営者も社員も、フラットにお互いが学び合い、助け合う日本式経営を取り入れ、会社を大きくすることができました。



左からダヤシリさん、2人おいて谷川、ひとりおいて牧野さん

【プロフィール】

ダヤシリ・ワルナクラスーリヤ氏 Mr.Dayasiri Warnakulasooriya
1939年スリランカ（当時はセイロン）生まれ。1960年21歳で愛知県瀬戸市に個人留学生として来日。専門学校や窯業訓練所で8年学び、節子夫人とともにスリランカに帰国。帰国後にミダヤ・セラミック設立、日本式経営を取り入れて、経営者として大きな成功をおさめる。スリランカ日本語教育協会の会長、ロータリークラブ・オブ・コロンボの中心メンバーとして様々な社会奉仕活動に積極的に取り組む。

Q: AEFAとの出会いは？

シニアボランティアとしてスリランカで活動していた牧野卓夫さん（2021年逝去。AEFAスリランカ担当として活躍いただきました）の紹介で、AEFA創設者の谷川さんに会いました。東南アジアを中心としたAEFAの活動を、それ以外の国や地域に活動を広げようと模索していたそうです。

スリランカは英国の植民地だった時代がありますから、学校が無いということはなく、また政府も長年教育に力を入れてきました。しかし、校舎の老朽化や教室不足に対応するための政府の資金が不足しています。谷川さんの教育への熱意に共感し、AEFAプロジェクトをスリランカで実施するため、できることはなんでもしようと思いました。ロータリークラブの仲間も、ボランティアとして参加してもらっています。

Q: ダヤシリさんから見たAEFAのプロジェクトの特徴はなんですか？

どの国においても、教育は大変重要です。AEFAのスリランカでのプロジェクトは、小学校の整備に集中してもらっていますが、教育の起点として、学びへの意欲を高めるためにも、小学校は特に大切です。

日本の支援者の方々と交流も素晴らしいです。昨年秋にいらしたエルセラーン1%クラブの方々は、子どもたちと親しく交流して下さって、子どもたちに深い印象を残しました。長野篠ノ井ライオンズクラブは、100年以上昔に建てられ、老朽化で危険だった校舎を新たに建て直してくれました。その学校の前を通るたび、今も感動がこみあげてきます。

Q: スリランカでプロジェクトを進めるにあたって大変なことはなんですか？

スリランカでは信頼できる建設会社を選ぶことがとても難しいです。いつも、とても気を使っています。コロンボから遠く離れた地域でも、信頼できる実績ある会社に依頼して行ってもらったこともありました。

スリランカ政府も教育に力を入れていますが、「支援してほしい」という学校からの問い合わせが私にも多くきていることは事実です。教室だけでなく、椅子・机や教材も十分整っ

ていません。昨今、日本の経済は厳しいと聞いていますが、そんな中でも日本の皆さん、そして、AEFAはスリランカの教育のために頑張ってくれています。私も私の仲間たちも、これからもできる限り協力します。

そういえば、先日、新しく着任された日本大使館の方に会う機会があって、AEFAの活動についてお話したところ、大変驚き、喜んでくれました。「ダヤシリ先生、ぜひAEFAから役職をもらってください！」なんて言われてしまいましたよ（笑）。

Q: ダヤシリさんは「AEFAスリランカの代表」ですからね。ところで、2023年にAEFAの理事長が、創設者の谷川から2代目の亀井に交代しました。

亀井さんは、谷川さんとは異なるバックグラウンドの人ですから、失礼ながら、最初は心配だったのです。でも、昨年秋に支援者の方々と一緒にスリランカを訪問されたとき、現地の子どもたちや村人たちともすぐに仲良くなって、交流活動でも本当に一生懸命やってくれました。みんな喜んで、素晴らしいかったですよ。

谷川さんにも、まだまだ元気で活躍して欲しいです。谷川さんの子どものためにという想いは、私の想いとも重なるものです。



スリランカと
ダヤシリさんのこと

亀井 善太郎

スリランカは、もともとセイロンと呼ばれ、私たち日本人にとっては紅茶で有名な国です。

僕自身、昨年同国を訪れたときに、スリランカの方たちとお会いして、いろいろお話できました。皆さんとても穏やかで、温かい気持ちを持つ方たちばかりです。

先の大戦後、1951年のサンフランシスコ講和会議において、セイロン代表として参加したジャヤワルダナ蔵相（その後、第二代大統領に就任）は「憎悪は憎悪によって止むことなく、慈愛によって止む（Hatred ceases not by hatred, But by love.）」と発言し、敗戦国である日本に対する厳しい国際世論を乗り越え、日本の主権回復、独立の実現に大きな後押しとなりました。日本人として忘れてはならないことだと思います。

Q: これからどんなことに取り組みたいとお考えですか？

経営者としての責任もありますが、ロータリークラブを通じた社会貢献活動、地方の学校の生徒への奨学金の給付、身体の不自由な方のための学校や施設の支援などにも取り組んでいます。また、日本語教育協会の会長、日本語学習チャンネルの提供、ササカワホール（日本文化センター）、AOTS（海外産業人材育成協会）など日本と関わる活動もたくさんあります。スリランカでは日本で学びたい、日本で働きたいと、日本語を頑張って勉強している人も増えています。これからも、日本とスリランカの未来のために尽くしたい、自分ができることを続けていきたいと思っています。



築100年超の老朽校舎が新校舎に。ギリウラムヒンダ小学校

さらに歴史を遡ると、明治5（1872）年、日本で初めて鉄道が走った新橋ー横浜間の汽車はセイロンから譲り受けたものでした。

セイロンは「東洋の真珠」と呼ばれる豊かな国でしたが、その後、シンハラ族とタミル族による内戦が起き（1983年から2009年まで）、社会は長く停滞しました。

ダヤシリさんは、この間、事業を通じてスリランカの発展に寄与しただけではなく、日本語教育などを通じたスリランカと日本の交流に取り組んでいらっしゃいます。また、病院の医療の向上、さらには、障がい者のための住まいと学校への支援も長年にわたって継続されています。こうした活動にはご子息たちのご尽力も欠かせません。僕も、スリランカ滞在中にその一つひとつの活動を拝見させていただきました。いずれも、スリランカの社会にとって不可欠な活動です。スリランカのたくさんの若い人たちが真剣に日本語を学ぶ姿に、ダヤシリさんが両国の架け橋として活動してこられた果実を見る思いがしました。

ご縁を賜り、AEFAもダヤシリさんたちと共に、教育環境が十分に整っていない地域を対象に、学校建設を通じた教育支援に取り組んできました。子どもたちは、将来、日本で学びたいとお話してくれます。人と人のつながりを大切にしながら、これからも、スリランカとの協働をしっかり進めていきたいと思っています。

AEFA プロジェクト Now

2025年4月末現在

教育の場を整える学校建設から始まったAEFAの活動は、現地の環境変化を受け、図書館活動や奨学金などの教育支援プログラムにも広がってきています。

現在進行中、支援者募集中のAEFAプロジェクトを、現地からの報告を交えてお伝えします。

学校をつくる、ととのえる

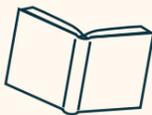
国名・学校名・支援者名(敬称略)を記載しています



完成	ベトナム ドンナム分校 一家恵理	ドンナム区域は山岳部で、点在する家々から子供たちが通う、区で唯一の学校です。築20年以上を経た校舎(教員室)は古いものの、丁寧に手入れされています。教室不足のため、2教室新校舎を建設しました。写真①
完成	ベトナム チュンミン半寄宿小中学校 一家恵理	地域の5つの分校から3年生以上の児童が学ぶ拠点校で、教育の質の向上に取り組んでいる意欲的な学校です。通学が困難な生徒たちは寄宿舎に入り、食糧の確保と栄養の充実もはかっています。小学校は8クラスあり本来8教室が必要ですが現在は6教室しかなく、隣接する中学校を間借りしたり、多目的室を教室代わりとしています。不足を補うため2教室の校舎を建設しました。写真②
進行中	ベトナム ドイホン分校	中越戦争当時戦火から逃れてきた人々が集住する地域で、8つの民族の子どもたちが学ぶ学校です。年々児童数が増え、老朽化した校舎は危険で使用できないため教室不足となっています。4教室の新校舎を建設します。
進行中	ベトナム サマン分校	タインホア省のラオス国境に近い山間部の脇道を入った奥地にある小さな学校です。本校からは10キロ以上離れているため、この地域の子どもたちの唯一教育の場です。現校舎の老朽化に伴って、同じ敷地内に新しい教室を建て替える計画です。
進行中	ベトナム フアプー分校	フアプーはタインホア省で最も貧困度の高い地域です。2~5年生児童は10キロ離れた本校へ通い、1年生は村の幼稚園に間借りして学んでいます。児童が地元で学べるよう、小学校校舎の新設を希望しています。
進行中	スリランカ ランミヒタンナ小中学校	貧困地域にありながら、児童生徒の学習意欲はきわめて高く、修了試験でも良い成績をおさめています。現在の校舎では教室が不足しており、一般授業は可能ですがそれ以外の活動ができない状況です。2教室の新校舎を建設します。写真③
募集中	ベトナム クートー分校	イエンバイ省の経済的困難を抱える地域の学校ですが、通常のカリキュラムに加えて、子どもたちに自分自身を表現することを学ばせたい、とアートや英語のクラスを実施しています。児童数の増加が見込まれるため教室不足を補い、さらなる教育の質の向上のための専科教室も備える、新しい校舎の建設を計画しています。写真④
募集中	ラオス ナカロン小学校	南部サラワン県ラオガム郡 AEFAプロジェクト「クアセット小学校」の学区にあります。今の教室は老朽化して危険な状態で、ラオガム郡の中で最も新校舎建設が必要なところです。

図書館をつくる、本に親しむ

国名・学校名・支援者名(敬称略)を記載しています



完成	ベトナム ヴァンフー小学校 一般社団法人ゼブラ社会貢献支援協会(ZESCO)	少数民族児童が多く学ぶ学校で、本を読む環境を整え読書啓蒙活動を実施することは言葉の学習にも大変役立ちます。先生方も読書教育に強い意欲を持っています。写真⑤
完成	ベトナム ドイホン小学校/ティエンタン小学校 エルセラーン1%クラブ	両校とも、バクザン省イエンター郡にある学校です。CSDのレインボーライブラリーの活動の評判を知り、参加したいと手を挙げました。今年3月、日本からご支援いただいた方々が訪問して開館式を行いました。写真⑥⑦
完成	ベトナム ドンティエン小学校 株式会社ディアーズ・ブレイン	タイ族、ヌン族ほか少数民族の児童が学びます。2つの分校が統合され、特に1年生の児童数が倍増しました。昨年12月の開館式では、日本から参加した支援者のみなさまに子どもたちが積極的に英語で話しかけ、交流を深めました。
進行中	ベトナム ルオンゴアイ小学校	少数民族ムオン族の児童が98%以上を占める学校です。読書環境を整え読書啓蒙活動を実施することは、少数民族の子どもたちの言葉の学習に大変役立ちます。
進行中	ベトナム ルンニエム小学校	2022年プロジェクトのパンコン校にいた先生が、新たに副校長として赴任した学校です。パンコンにおける図書館と読書啓蒙活動で子どもたちの変化を実感したことから、ぜひ参加したいと希望しています。
進行中	ベトナム アムヒウ分校	少数民族ターイ族の児童が97%を占める学校です。図書館のほか、新たなトイレ棟も整備します。

進行中	ラオス スクサムパン中高校	環境意識を啓蒙する教育プログラムを導入し、子どもが中心となって、学校の環境整備や緑化に熱心に取り組みました。図書館の活動への参加を切望しています。
進行中	ベトナム フォンヴィ小学校	多くの児童が学ぶ大規模校で、教室はそろっていますが図書室がありません。現在は多目的室と図書室を併用していて、多目的室を使用中には本を読むことができません。
進行中	ベトナム バクムック小学校	「知識は未来への扉を開く鍵」と、先生たちは熱心に授業に取り組んでいます。子どもたちが創造性や積極性を育み、更なる学びを充実させるため、図書館と読書啓蒙活動を切望しています。写真⑧
募集中	ラオス ファイルーシ小学校	これまでにAEFAプロジェクトで小学校2棟、幼稚園を整備してきました。学業もスポーツも活発で、地域のモデル校となっています。先生たちは意欲的で、子どもたちの学びのため読書啓蒙活動に参加したいと希望しています。
募集中	ベトナム ティップダオ分校	イエンバイ省の山岳部にある学校で、ザオ族とモン族の子どもたちが学びます。STEM (science, technology, engineering and mathematics) を学んだり読書啓蒙活動を行う施設の建設を計画しています。写真⑨



① ドンナム分校



② チュンミン半寄宿小中学校



③ ランミヒタンナ小中学校



④ クートー分校



⑤ ヴァンフー小学校



⑥ ドイホン小学校



⑦ ティエンタン小学校



⑧ バクムック小学校



⑨ ティップダオ分校



募集中

募集中のプロジェクトは、みなさまのご寄付をお待ちしているプロジェクトです。詳細は、お気軽に事務局までお問い合わせください。

子どもと若者の自立をささえる



募集中	ラオス リトルシェフ(栄養改善)	長期化する経済危機により山岳少数民族の人々の生活は厳しさを増し、特に女性と子どもの栄養不良と健康問題が起きています。子どもたちの命と健康を守るためのプロジェクトです。
募集中	ラオス 先生基金	教員養成校や職業訓練校などで学ぶ若者や、政府から給料がでなくても子どもたちの為に教えているボランティア先生の支援、また、学校に養魚池をつくり食糧支援とするなど、今最も必要とされることへ届けます。
募集中	マレーシア CSO学校運営支援	Chin Student Organization (略称CSO)は、ミャンマー北西部チン州の山岳地帯から、国軍による弾圧や武力衝突を逃れてきたチン族難民の若者たちが運営する、マレーシアにある学校です。子どもたちの学びたい、を支えます。



リトルシェフで手洗いの大切さを学ぶ



CSOで学ぶチン族難民の子どもたち



シンカム ブンミー 君
24歳
サラワン県トゥムラン郡タブ村出身
サラワン県保健衛生短大

ラオス 奨学生からの便り



看護師を目指して学んでいるシンカム君からのお便りです。

みなさまの応援で、若者たちが「コミュニティのために今度は自分が役立ちたい」と学びを続けることができます。応援を引き続きよろしく願いいたします。

小4の時父を、中1の時母を亡くし、兄の家族と一緒に暮らしてきました。

経済的事情から一度退学しましたが、トゥムラン郡の奨学金で少数民族学校に通うことが出来ました。高校卒業後は、中国資本のバナナプランテーションで月給2~3万円で働きました。その後、サラワン県保健衛生短大に進学し、プランテーションで働いていた時のお金と、バイト(平日夜はホテルのウェイト。週末は市場の荷物運び)で学生生活を始めました。インフレのため生活苦に陥り、兄にお願いして、お母さんの遺産の水牛を売ってもらって8万Kip(約6万円)勉強を続けてきました。が、それでもお金が足りず、学業とバイトの両立も厳しく困っていました。

その時、先輩のヴォンダ君(AEFA奨学生)からACD&AEFA奨学金に応募してみたらとアドバイスをもらいました。思い切って挑戦してみたところ、奨学生として勉強を続けることができます。

いま、サラワン郡の診療所でインターンとして頑張っています。これからも学業に励み、看護師となって病気の方やコミュニティで支援が必要な人たちのためにベストを尽くすことをお約束します。

※AEFA ホームページで、シンカム君がインターンとして頑張る様子をはじめ AEFA 奨学生のその後について、最新情報を紹介していく予定です。

坪井未来子の ベトナム遠景・近景 ④



戦後半世紀の今できること

ベトナムを初めて訪れた日から三十余年。「ベトナムに詳しい人」として意見を求められることがあるのですが、内心「まだまだ知らないことばかりのに」と躊躇することも多いです。最近では、ファン・トゥイ・ハー著『私はお父さんの娘です』を読んで、改めて「私はこんなにも知らなかったのだ」と呆然としてしまいました。

それは日本だったかもしれない ——分断を背負った国、ベトナム

皆さんもご存知かもしれませんが、ベトナムは、第二次世界大戦後の世界情勢を背景に、1954年から1975年まで北のベトナム民主共和国(共産勢力)と南のベトナム共和国(米国の支援を受ける)という二つの国に分かれていました。今を去ること半世紀前の1975年4月30日、共産勢力側の北ベトナムが南ベトナムの首都を「解放」し、ベトナム戦争が終結して国土が統一されました。北が官軍、南が賊軍となったわけです。そのため、以後ベトナム戦争について語られる際、南ベトナム側に付いた人々の声というのは、ベトナム国内で取り上げられることはほとんどありませんでした。そんな中、『私はお父さんの娘です』は、元南ベトナム軍の兵士で、かつベトナムに住み続けている人たちの語りを中心に書かれており、これまで焦点が当たらなかった人々の「戦後」をありのままに伝えています。その「ありのまま」が私にはあまりにも衝撃的で、冒頭のように呆然となってしまったのです。著者のファン・トゥイ・ハーさんは「ベトナム戦争後世代」、1979年北部ハティン省生まれでハノイ在住ですが、北部で暮らす中、元南ベトナム軍兵士のその後について何も知

らないことに気づき、これまで声を持たなかった人々の声を集め、この作品にまとめたそうです。ベトナム戦争を生きた世代が高齢に差し掛かっている中、今も可能な限り多くの声を残そうとしています。半世紀という時が経ったからこそ語れることもあるようです。戦争や分断が一人一人の人生に残した傷跡が、彼らの言葉を通して胸に迫ってきます。

あの時代、朝鮮半島とベトナムは南北に分断されました。ただそれは、もしかしたら日本でも起きたかもしれない、そう考えると、他人事ではありません。ベトナム戦争のあらゆる立場の人々の声に耳を傾けようとする姿勢、まなごしを持つことは、ベトナムやベトナム戦争についての理解の助けとなるだけでなく、同じ時期、同様に暗闇のような時代を過ごしたラオスやカンボジア、中国やミャンマー、インドネシアなど周辺国を含むより広範な世界への関心が広がるとともに、戦争とは、国家とは、人間とは、生きるとは…を深く考えることにもつながるのではないかと改めて思いました。

中でも、「声なき人の声を聴く」こと。これは、AEFAの活動でも大切にしたいことです。プロジェクトを進める際には、何が最適解なのか、正直迷うこともあります。そんなとき、声なき声にも耳を傾ける姿勢を忘れず、その地域の子どもたちにとって、あるいはそのコミュニティの未来にとってよりよい学びの環境を整えるお手伝いができたらいいなと思っています。

実は、『私はお父さんの娘です』を現在翻訳しています。きっかけは、昨年7月のAEFA山形ワークショップです。このワークショップにご参加くださった、恩師である今井昭夫先生(東京外国語大学名誉教授)が、その時の雑談からハーさんとのご縁をつないでくださり、あれよあれよという間に私が翻訳する運びとなりました。先生にもご指導いただきながら、軍事用語や農業用語、歌や詩などと悪戦苦闘し、きっと数年もすればAIが一瞬にでもっといい翻訳を出すだろうと思いつつも、ベトナム戦争終結50年の今だからこそ日本の皆さんに届けたい、という思いで進めています。順次noteにアップしておりますので、ぜひ覗いてみてください。



「私はお父さんの娘です」の著者、ファン・トゥイ・ハーさん(左)と坪井



ホーチミン市の街角。建国の父ホー・チ・ミンのポスターが目立つ

ベトナム・ドキュメンタリー文学紹介
『私はお父さんの娘です』



note | Mikiko
https://note.com/tsuhoi_mikiko/n/n88e947df505c